

物語の舞台を訪ねて(2)

『聖マルコ殺人事件』

- ダンドロ小館 (ヴェネツィア)

中間 ゆみ

タイトルに「殺人事件」と付くが、「囉サスペンス劇場」よろしく竹林から全裸死体が発見されるわけでもなければ、アリバイ崩しが行われるわけでもない。嫡子でなければ貴族ではなく、貴族でなければ政治家にはなれないというヴェネツィア共和国(聖マルコ)の掟が、ひとりの有能な男を破滅へと追いやった - そういう意味での「殺人」である。

『聖マルコ殺人事件』は1987年4月より雑誌「週間朝日」に連載され、1988年に同タイトルで単行本化された。その後1993年に文庫化される際には『緋色のヴェネツィア』と改題し、1999年には三部作といわれるほかの二都市の物語『メディチ家殺人事件』(フィレンツェ)、『法王庁殺人事件』(ローマ)とあわせて『三つの都の物語』のタイトルで再度単行本化された。

実在の人物を主人公に据えて、史実に沿って展開される歴史小説的な作品が多い塩野作品には珍しく、架空の人物が主人公で小説的な要素の多い作品である。

徹底した現地調査に基づいて書かれていることでも有名な塩野作品であるが、本作品もご多分にれず、逆に主人公がたどった道をそのとおりに歩けば、物語と同様の風景が展開されることになる。

物語の冒頭で主人公マルコ・ダンドロが歩いたように、聖マルコ寺院の前を通り過ぎ、左に折れば元首公邸パロット・デューレの入り口にたどりつくことができる(現在こちらの入り口からは観光客は入れない)。マルコが上がった「黄金の階段」スカーラ・ドーロには鎖がかけられていて、のぼることはできないが、公邸の2階部分には別の階段を使って行くことができ

る。この2階部分には元老院の会議場があり、四辺の壁面から天井から、ヴェネツィア共和国の数々の歴史上のエピソードを記念した壁画で埋まっている。



元首公邸を出て、聖マルコ広場の西側に開いた路を小運河沿いに行けば橋がかかっている。そう、マルコが友人のアルヴィーゼの視線を感じたあの橋だ。橋を渡りきり、それに続いてのびている小路を行くと、聖ルカの広場が現れる。聖ルカの広場を通り過ぎ、小路を抜ければ小ぶりの広場に出る。その正面にダンドロ家の屋敷の陸側の入り口がある。(写真)

ダンドロ小館(Palazzetto Dandolo)は現在はカフェになっている。喫茶の場合はテラス席だが、軽食をとると建物の一階部分に入れてもらえる。

運河にはゴンドラの船頭がたむろしているので、交渉して「囚われのマルコ運行コース」でゴンドラで元首公邸まで戻るのも一興。C. D. X. の尋問室を経て、ため息の橋を通り、牢獄を見学するのもよいかと思う。

この小説は柴田侑宏の脚本・演出で、1991年に「ヴェネチアの紋章」のタイトルで舞台化もされている。

聖マルコ広場に面する最古のカフェ「フローリアン」で、「ヴェネチアの紋章」の実況CDを聴きながらカプチーノでもいただく。当然、手には文庫版の本作品というのがこの上もなく贅沢なヴェネツィアの過ごし方のひとつかもしれない。

なかま ゆみ(司書)